

『かつて
勝手な
はなし
話』

作者 浅羽 一

出し抜けにインターホンが鳴ったのは、いそいそと出かける支度をしていた時だった。待ち合わせの時間まで、まだ十分すぎるほどに余裕はあるが、かといって関係のない来客に邪魔をされるのは面白くない。それに、僕はいつも彼女より先に到着しておいて、のんびりと待っている時間も好きなのだから。

無視をしようと決めた。約束もしていない来訪者より、着ていく服に合わせるネクタイの色の方が重要だった。彼女の好きな黄色にしようか、それとも爽やかな夏空に倣ったまには水色くらいを試してみようか。シンプルな姿見の前で、白いシャツの上に二本のネクタイを交互に載せてみる。穿いているズボンの黒と調和するのは、やはり黄色の方だろうか。

と、そこでまたインターホンが鳴った。どうやらまだ帰っていないかもしれない。けれども関係ない。居留守を使うと決めたのだから。だが…。

「…嘘だろ」

信じがたいことに、三度目のインターホンまでの間隔は短かった。そして四度目、五度目に至ってはもっと短かった。一回の音が鳴り止むのを待たずに、次の音が機関銃の弾よろしく生み出される。次々と、連続して、際限なく、延々と―。

「分かったよ、出れば良いんだろ、出れば」

いい加減に忍耐も限界を迎え、僕はネクタイを両手に掴んだまま足早に玄関へと向かった。さして広くもないワンルーム・マンションでは、二秒とかからずそこへと行ける。にも関わらず、さらに三度、電子音は鳴らされた。

腕時計をはめた左手でまとめてネクタイを持つと、チェーンをドアにかけてから、乱暴に取っ手を握る。頭に血が上っていたせい、ドアの覗き穴の存在などすっかり忘れていた。

「はい？」

鬱陶しいという気持ちを可能な限り表したくて、本来のものよりも遙かに低い声を出しながら、勢いよくドアを開ける。直後に生まれたチェーンの音が、八つ当たりじみた行為を避難するみたいに大きく響いた。

他に誰もいない廊下に立っていたのは、まるで見知らぬ女だった。それも、まだ少女と呼んでも差し支えなさそうな。装飾品など無く、小柄な体に袖のない、ふわりとした淡色のワンピースを纏った可愛らしい姿は、とても悪戯や嫌がらせをする風には見えなかった。

少なからず思いがけない相手だったせいで、むしろ僕の方が驚いてしまう。少女の方と言えば、いきなり鼻先に迫ってきただろう鉄の板にも全く表情を変えていなかった。唯一の動作は、今にも折れそうに華奢な腕が、真っ直ぐにインターホンへと伸ばされていた状態からゆっくりと下ろされていった事だった。

「…あの、どちら様ですか」

敬語気味に話しかけている自分に気付いたのは、言葉を発した後だった。

女の声は、丸みを帯びて少し高かった。「シノです」。

「シノ？」

「はい」

知らない名前だった。

「えっと、で、一体どんな用件で」

「とりあえず中に入れてもらえませんか」

「は？」

最初、聞き間違いだと思った。それから続いて冗談だと。しかし、そうでないと言うことはシノの眼差しが物語っていた。両肩に垂らされた黒髪に縁取られている小さな顔に、はめ込まれている風にも見える大きな黒目は、微塵の揺らぎもなく扉の隙間から覗く僕のことを見据えていた。化粧っ気などほとんど感じられないのに、病的なほど白い肌と、そのくせ妙に艶っぽい紅唇は、瞳と相まって人形めいた雰囲気醸し出している。

「中に入れてろって…。この部屋に？」

「はい」

「ここ、僕の部屋なんだけど」

「はい。あなたの部屋ですね」

淡々と答えるシノの口調によどみはない。だからこそ、僕は正気を疑いたくなり、彼女の顔をまじまじと見つめた。

すると、ほんの僅かに視線を逸らされた。仄かに白い肌へ朱の差した気もしたが、それはきつと錯覚だろう。それよりも今、重要なことは、この「シノ」と名乗る女への対処法だった。何となく、危ない感じがしてきた。

「ちよ、ちよつとだけ待ってくれる？」

早口に告げて、急いで扉を閉めようとする。とにかく、部屋に戻って警察に電話しよう。

だが、僕が完全に扉を閉め終わる寸前、シノの声が薄紙一枚ほどの隙間から滑り込んできた。「もしも、あなたがこのまま扉を閉めて、その場を離れたら」。その声音がそれまでよりも僅かながら大きく聞こえたせいだろうか、僕はほとんど意識せず動きを止めていた。そして僕は、結果的にそれが正しかったことを直後に思い知らされる。

「私は、ここで手首を切って死にます」

日本語そのものを忘れてしまったのかとさえ思った。けれど本能は理性を待たずに体を動かした。

きつと、最初にそれを開けたときよりも遙かに激しい勢いで再び扉を押し込んだ僕の目に、いつの間に取り出されたのか、刃が剥き出しの安全剃刀が飛び込んできた。危険防止の為の工夫など何も無く、細い髪の毛でも容易く縦に真っ二つに出来そうな薄氷のごとき刃は、その名とはまさに対極的な迫力を放っている。

シノは、呆然とする僕の目を見て、微笑んだ、それも嬉しそうに。きつと、滑らかな左手の手首に、剃刀の刃がぴたりと当てられてさえないなければ、とても魅力的だっただろう。

「本気ですよ？」。そう言って、剃刀を微動だにさせないまま子供みたいに小首をかしげてみせた彼女の姿は、あまりにも超現実的過ぎていっそ道化じみていた。言うまでもないが、全く笑えない最低の芸だ。携帯電話をズボンのポケットに入れていなかったことを心の底から後悔した。

「とりあえず中に入れてもらえませんか」。シノは再びそう言った。

僕は何も返せなかった。すると彼女は、その微笑にかすかに悲哀をにじませた。「警察が来るまで、もしくは救急車が来るまで、早くても十分から十五分。もしかしたら助かるかも知れませんが、でも、私は本気です。本気で死ぬ気で切ります。勿論、あなたにとつて私の生死なんてどうでも良いことなんですけど、それでもやっぱ気分は悪いですよね。

まあ、もしもあなたが手当をしてくれると言うのなら、それはそれでされてみたい気もしますが」。

急かすでもなく、焦らすでもなく、シノは事実を事実として語ると言う風に言葉を紡ぐ。ただし、ほんの少しだけ、彼女が口を閉ざすと同時に、薄い刃が傷一つ無い肌を押して凹ませた。

だが、それでも僕は何も言えないでいた。と言うか、何も言いたくなかった。そもそも一切の関わり合いを避けたかった。

するとそんな想いを悟られたのか、シノは一度だけ小さく溜息を吐くと、「仕方ないですね」、信じがたいことであつたが本当に躊躇う様子もなく右手を真横に引こうと一。

「待って、分かった。分かったからマジで止めてっ」

自分がそんなことを口走っていることに気付いたのは、それらを全て吐き出してしまつてからだつた。しかし、それも詮無きことだろう。

「本当ですか」

一転して嬉しそうな表情で剃刀の刃を手首から持ち上げるシノ。「……ああ」。苦々しい想いを噛み潰すように歯の間から声を絞り出した僕の網膜に、白い皮膚にうっすらと走つた赤い線から、ぷくりと丸い玉が生まれる光景が映し出されていた。「心配しないで下さい。あなたには絶対に、この刃を向けたりしませんから」。自身の怪我也無視して嬉しうに話す少女の様子に、僕は安堵を感じるどころかさるなる不安感を抱いてしまふ。当然ながら、信じる気なんてさらさら無かつた。

「それじゃあ、扉を開けて下さい」

「……………」

「開けて、下さい」

「…分かったよ」

渋々頷きながらも、僕はすぐに従うことなく周りに視線を走らせる。靴やビニール傘など雑多なものが散らばっていたが、使えそうなものと言えば玄関脇の電気コンロの上に置きっぱなしにされていたフライパンくらいだつた。数時間前に朝食と昼食を兼ねて作ったインスタント焼きそばのソースの滓がこびりついていたが、今更そんな無精を恥ずかしく思う余裕など皆無だつた。「鎖を外すから、いったん扉を閉めるよ」。そう言つて僕は素早く扉を閉めてチェーン・ロックを解除すると、再び取っ手を掴むことなくそのまま空いた右手でしっかりとフライパンの柄を握つた。

およそ五秒後、ネクタイとフライパンを真剣な顔をして構えているという、端から見ればきつと滑稽に違いない格好の僕の前で、ゆっくりと扉が開かれた。

左手で扉を引いて現れたシノは、にっこりと笑っていた。右手には、相変わらず剃刀が握られていた。血はもう止まっていた。

「ありがとうございます」

シノが一步、玄関へと足を踏み入れて、丁寧な仕草で頭を垂れた。静かに扉が閉まる。

僕は何も言わず、彼女の歩幅と同じだけ後退した。一瞬の油断が命取りになるかも知れないのだ、ある意味ではお互いにとって。最早、猟奇的事件に巻き込まれた気分だつた。

「上がって良いですか」

問いかけのくせに、シノは答えを待つこともなく白いパンプスを脱ぐ。小汚いスニーカー

ーやサンダルに混じって、綺麗に揃えられた真新しい女物の靴が並ぶ光景は違和感たっぷりだった。

「ネクタイを選んでいたんですね。ネクタイ、好きですもんね」

聞き流してしまうには問題を孕みすぎている内容を、シノはさらりと口にする。「今日はその二本で悩んでいるんですか」。細い生足を滑らせるように、彼女は近付いてくる。

「：関係ないだろ」。僕はネクタイを背後に隠し、狭い廊下を後じさる。

一定の距離を保ったまま、短い廊下を渡りきり、開けっ放しになっていた扉を抜ける。薄いカーペットの上には、ズボンやシャツが脱ぎ散らかされていて、部屋の真ん中ほどにある背の低いテーブルを見れば皿やコップなどがそのままになっている。そんな状況で無いは重々承知していたのだが、あまりにも生活感の滲む光景だったせいか、そこでようやく仄かながら気恥ずかしさめいた感情が湧いてきた。この二分ほどの間に、少しは頭の中にゆとりが生じたのかも知れない。もしくは己の部屋の中と言うことで安心感が多少なりと得られたからか。シノはと言えば、そんなこちらの心情などまるで気にした風もなく、部屋の入り口に立って興味深そうに室内を無遠慮に見回していた。

「とりあえず、座ったら」

シノの様子から、どうせすぐに出て行ってはくれないだろうと悟った僕は、そんな提案をする。単純に、立ったままでいつ飛びかかれるか分からない状況よりもまだマシだと思えたからだ。彼女は「ありがとうございます」と素直に従った。

カーペットに直接、腰を下ろすシノ。正座を斜めに崩したような女性らしい座り方は、今ひとつ緊張感を欠いていた。とは言え、床に置かれた右手には変わることもなく剃刀の刃。恐怖よりもうんざりとした気分を抱き始めていた僕は、クツションなどを勧めるはずもなく、彼女が完全に動きを止めたのを確認してから同じくその場にしゃがみ込んだ。

部屋の入り口辺りにシノ、二メートル弱の距離を空け、テーブルと姿見に挟まれて僕。さり気なくネクタイを床に置いた僕は、代わりにテーブルの上にあつた携帯電話に手を伸ばす。けれどシノは何も言わず、ただじつとこちらを見つめていた。

しばらく無言のやりとりが続いた。僕は下手に彼女を刺激しない為にも、フライパンこそ構えたままだったが、とりあえず携帯電話だけは体の脇に置いて気配を窺っていた。と、そこで不意にシノがくすりと頬を緩めて見せた。そして、「こうしていると、なんだか二人で寄り添っているみたいですね」。

すぐには言われている意味を把握できなかった僕だが、彼女の視線を追い、やがて理解する。シノは、どうやら僕の隣の姿見に映る自身の姿を見ているらしかった。

僕は何気ない素振りを装って、姿見を押し、鏡面の向きを僅かにずらす。だが、それでも効果は十分にあつたのか、シノは何も言わなかったものの、かすかに笑みを悲しげなものへと変えた。勿論、同情なんて微塵も抱かなかった。

「あのさ」。いい加減に、このままでは埒が明かないと思い、僕は本題に取りかかる為の話の口火を切った。「それで、君は一体、何が目的なの」。

シノは、一度だけ間を置くように唇を濡らしてから、言った。「私を、抱いてくれませんか」。

束の間の沈黙。それを経て、ようやく僕は聞こえた内容を理解した。しかしだからこそ、我が耳ながら疑わざるを得なかった。「：は？」。

彼女は再度、「二度だけで良いんです。私を、抱いて下さい」と言った。

今度こそ、僕は彼女の頭の仕組みを疑った。戯れ言にも程がある。根本的に異常者であるとするれば話はそれまでなのだろうが、だとすればまともな会話など全く期待できないことになる。早くも、シノを部屋に上げた選択に対する後悔が津波のごとく押し寄せてきた。とは言え、廊下を血の海にすれば良かったとは、欠片も思っていないけれど。

「…何を考えているんだよ」

僕は声を絞り出す。それに対してシノは即答した、どこか誇らしげに。「あなたが好きなんです」。

「嘘だよ」

「嘘じゃないです」

「そんなの、嘘に決まってる」

「どうしてそんなことを言うんですか」

シノの表情が翳る。まさか、本気で悲しんでいるとでも言うのか。

唾然とするしかない僕の前で、彼女は「あなたが驚くのは、分かりますけど」と前置きをしてから、言い訳めいた言葉を吐き出した。「こんなやり方でしか、あなたに近づく方法が分からなかったんです」。

正直、ぞつとした。

「…いつから」

「え？」

「君は、一体いつから、ストーカーなんてやってるんだ」

「ストーカーなんて言い方、止めて下さい…」

「だって、どう考えたってそうじゃないか」

「私はただ、あなたの事が好きなだけで」

「それがストーカーだって言うんだよっ」

あまりにも身勝手な主張に、思わず声を荒げてしまう。「こんな無茶苦茶な事をして、『好きだから』だけで済むはずがないだろ」。

シノは何も反論をしてこなかった。ただ、無言でこちらを見返してくる。唇を引き結び、眉を寄せ、恨めしそうと言うよりも今にも泣き出しそうな眼差しを向けてくる。

僕もまた、言葉を失ってしまった。卑怯だと思った。これでは、僕の方が加害者みたいではないか。

「…それでも、好きなんです」

ぼそりとシノは言った。僕の方を向いているくせに、僕を見ていない。「一度だけで、良いんです。それだけで十分なんです」。卑屈な口調で、一方的な要求を繰り返す。「思い出を下さい。それ以上、あなたに迷惑は掛けませんから」。

僕は答えてやった、これが現実であることこそを思い出させてやる為に。「無理だ」。シノの瞳の焦点が、僕のそれに重なった。

「君の要求には応えられない」

「…どうして、ですか」

「僕には、付き合ってもう二年になる彼女がいる。その子を裏切ることは、絶対に出来ません」

「嘘です」

「嘘じゃないよ」

「だって、そんな人、一度もここに来たことなんて無いじゃないですか」

「：君がどうして、そんなことを知っているのか、それはとりあえずとして。デートは基本的に外だから。それに、この部屋に来ることが無くても、僕が彼女の部屋に行く事はあ
るし、しょっちゅう声も聞いている。喫茶店で一緒にお茶を飲んだり、たまには映画を見
に行ったりもしているよ。洋画よりも邦画の方が好きな子なんだ」

実際、今日だってそうだ。彼女の仕事が終わって夕暮れ前の小一時間、僕達は喫茶店で
一緒にお茶を飲む。その店長お薦めのハーブティーを。それが最近の僕達にとっての定
番なのだ。

「それにね」

「それに？」

「知っているからさ。君みたいな人種が、とても欲張りだって事を。もしも本当に、今は
一度だけで良いと思っても、必ずそれだけじゃ満足出来なくなる。必ずね」

シノは否定しなかった。僕は「やっぱり」と心の中で頷いた。この類の身勝手な人間は、
自分のことしか考えていないのだ。相手のことなど、考えている振りをしているだけに過
ぎない。

「勘違いしないでくれよ。彼女がいなくなれば、どうにかなるとか、そんなことは有り得
ない。ましてや、君がどうかなんてもっと関係ない。僕達は愛し合っている。それはも
う、絶対に、永遠に。僕にとって、この先、彼女以外の人間を本気で愛する事なんて無い
と断言出来る」

そして最後に僕はこう付け加える、はっきりと。「僕が君を愛することは、絶対に無い」。
数分間の、沈黙。睨み合っているかのごとく見つめ合う僕達。クーラーは正常に稼働し
ているはずなのに、背と脇に汗がにじんでいるのを感じる。いつも通りカーテンを全開に
した窓からは眩しいほどに日差しが入り込んできている。これからは、真昼でも蛍光灯の
光を頼りにしなくてはならないのだろうか。ふと頭に浮かんだ考えに、気分がさらに滅入
った。

「いつも見ていたんです」。出し抜けに、シノはそんなことを言い出した。

「見ていた？」

「見えるんです。向かいのマンションのベランダから、この部屋のベランダが。私、そこ
に住んでいるんです」

再び、心の中で「やっぱり」と思う。むしろ間違っていて欲しかったのに。

「最初は、本当にただの偶然だったんです。でも、それからたまに、あなたがベランダ
に洗濯物を干している姿とかが見えて……。見ていただけで、楽しかったんです。何か、可
愛らしくて。どんな人なのか、とか想像したり、出掛ける時の服の趣味はどういうのな
のかなって、全身を思い浮かべたり。見ていただけで十分だったんです」

「……………」

「だけど、いつの頃からか、実際に会ってみたい、声を聞いてみたいって思ってきて……。
気付いたら、この部屋の前に立っていたんです」

それで、歯がむき出しの剃刀を持って、か。勘弁してくれと泣きそうになった。と言う

かそもそもだ、今時、刃先に何も施されていない昔ながらの危険なものだなんて、それを
使い慣れた年配の女性でないとすれば、普段からよほどのこだわりを持っていない限り、
そんなものを常備している事こそが確信的な性格の証拠と言えるのではないのか。異性
からこれ程までに褒められた事など、もしかしたら人生初の出来事かも知れなかったのに、
ちつとも嬉しくなれなかった。むしろ、せつかくの初体験がこんな最悪なると、悔しく
なりさえした。これが「彼女」から言われているのであれば、きつと飛び上がらんばかり
に喜べただろうに。

「帰ってくれ、頼むから」。それで、出来れば遠くに引越すか、そうでなければ窓に
暗幕でも張ってくれ。警察沙汰にはしないまま置いておいてやるから。

しかし僕の願いも虚しく、シノはふるふると首を横に振った。「お願いです、一度だけ」。
話は通じているのであるが、聞かぬ気がないようだった。…余計に質が悪い。

どうすればいいのだろうと考える。やはり無理矢理にでも警察を呼ぶべきだろうか。け
れど、そうなるとう中八九、ここで一騒動あるだろう。最悪、床の上が血まみれになるか
も知れない。それがどちらの人間の体から出たものであれ、後々までに問題を引きずるで
あろうことだけは確信出来る。ましてや、僕はまだまだ死にたくないし、間違っても殺し
たくない。だが、かといって、シノの要求を受け入れるという選択は、最も避けるべき
事だ。彼女がその後でどう言った行動に出るのか、そんな予測よりもっと重要な前提と
して、僕には裏切れない相手がいるからだ。いや、裏切りたくない相手が。その人を裏切
るくらいなら、目の前でこの女が事切れる様を眺めている方が良いとさえ思える、二者択
一の極論だけれども。

とは言え、やはり最善の策は平和的な話し合いによる解決だろう。改めてそう結論した
僕は、心の底から面倒だと思いつつも、もう一度、「お願いだから、帰ってくれ」と言っ
た。「そしてもう二度と、僕の前に現れないでくれ」と。

果たして、シノの回答は拒否だった。「嫌です」。そろそろ頭が痛くなってきた。

「どうか、お願いですから」。シノがゆらりと立ち上がる。一緒に右手も上げられる。
薄い刃が、こちらを向く。

「何を、するつもりだよ」。僕も慎重に腰を浮かしていく。剃刀よりも、シノの視線の
行方に神経を注ぎながら。刺激しない為にも、フライパンは置いたままにした。

「そんなに、私が嫌いですか」

「嫌だよ。二度と関わりたくない」

「どうしてそんな酷いことを言うんですか」

「今すぐにも出て行って貰いたいからさ」

「私は、要らない存在ですか」

その問いかけは、それまで以上に真剣な響きを持っていった。

だからこそ、僕もまた本気で答えた。「僕には、要らない」。

ややあって、シノは小さく「そうですか」と呟いた。うつむき、前髪が僅かに目を隠し
ている様子は、悲しそうで傷ついているのだと訴えている風であったけれど、無視した。
子供をいじめているみたいな、かすかな罪悪感が胸に湧いたが、押し殺した。今が正念場
だという気がしていたからだ。

と、唐突にシノが「ごめんなさい」と言った。「私なんかがここにきて、ごめんなさい」。

僕は「やつと帰ってきてくれるのか」と安堵しかけた。それこそが、最大の油断だった。「もう、消えますから。あなたの迷惑にならないように」

「え？」

そして僕は信じがたい光景を目にした。「これで、終わりですから」。シノの左手が平を上にして掲げられ、変則的な「前へならえ」をするみたいな格好になった。直後、シノの右手が左手に重ねられた。細い筋状のかさぶたは、まるで切取線みたいだった。

「止めー」

言い終わるよりも早く、僕の体は動いていた。

勿論、シノを救いたかったわけではない。少なからず薄情だと思われるかも知れないが、こんなストーカーの為にこちらが命を懸けなければならぬ謂れなど無い。

それなのに、だ。それでも、僕は動いた。小さな体に命を奪える力を備えた凶器に向かって、躊躇う間もなく手を伸ばして、掴んだ。素手で、むき出しの狂気を。

刃が皮膚を裂き、肉に食い込む感触は、一瞬のものであったはずなのに、妙に鮮明に意識へと伝えられた。熱せられた鉄板に触れた時にも似た痛みは、その刹那の後で訪れた。

反射的に腕を引くと、呆気なく剃刀は両方の手から離れて落ちた。一緒に、僕の手からは赤い飛沫が散った。カーペットに、脱ぎっぱなしだったシャツに、僕の靴下に、幾つもの紅点が斜めに走る。

痛みのせいか、小刻みに痙攣する右手を開いてみれば、手の平の真ん中辺り、綺麗な縁をした流線型の傷口がさして長くもない生命線と十字に交わっていた。ただ、血の量は、恐れていたほどではなかった。決して止まることなく流れているのだが、もつと噴水みたいに溢れ出る様を想像していた僕としては、僅かに拍子抜けの感があった。けれど、脈拍につられるように刻一刻と激しくなる痛みだけは、否応なしにそれを酷い怪我だと認識させてくれる現実だった。

「大丈夫ですかっ」。シノが悲鳴じみた声を発した。そして血の滴る手を心配そうに見つめてくる。

僕は、その滑稽さに失笑しそうになった。大丈夫なはずが無い。そんなことは見れば分かるだろう。

するとまたしても、シノが「ああ、どうしましょう」と言った。打算も後悔も欲望も、突発的な事態を前にほとんどの事が頭から消えてしまっている風だった。

だから、言ってやった。「勘違いしないでくれよ」と。決して忘れさせてはならないと、また期待させてはならないと悟ったからだ。「君を助けたかったんじゃない」。僕は低く威圧するみたいに言葉を紡いだ。「君なんかの血で、僕の物を何一つとして汚したくなかつたんだよ」。

シノは無言で聞いていた。「今すぐに出て行け。そしてもう二度と僕に関わるな。もしも次に現れたら、即座に警察を呼んでやる」。黙って言われるがままになっていた。「良いか、ちゃんと聞けよ」。それでも最早、容赦してやる気は微塵も起きなかった。「死にたいのなら、一人で勝手に死んでくれ。誰に迷惑を掛けることもなく。僕はそれを止めやしないから」。

我ながら残酷な発言だと分かっていたが、言葉は驚くほど滑らかに外へと生まれていた。どうやら僕という存在は、考えていたよりも遙かに、興味のない相手に対して冷淡な人間

であつたらしい。

そしてきつと、シノもまたそれを感じ取つたのだろう。限界まで開かれているかのごとく丸くなつている眼差しからは、驚怖と失望、それら以外のものを見出すことなど不可能だつた。

変な言い方かも知れないけれど。僕はようやく、シノと気持ちを通じ合つた事を確信した。絶対に顔には出さなかつたが、宇宙人エイリアンと意思の疎通が叶つた時にはこんな気分になるのだらうかとさえ思つた。

結果的に、シノは出て行つた。何も言い残さず、一度として振り返らず、僕の足下に血の付いた剃刀を残して。玄関の扉の閉まる音が消えた直後、僕は傷の手当てをするよりも早くそこに行つて鍵を掛けた。やつと、息をつくことが出来て、思わずへたり込みそうになる。不幸中の幸いか、血はもうほとんど止まつていた。

普段履き用のスニーカーを踏み潰したまま、硬い扉に背をもたせかけてぼんやりと考える。「ああ、部屋干し用の洗剤を買いに行かないといけないな」とか、「折りたたみ式のハンガー・ラックの置き場所も作らないとな」とか、「とりあえず警察に言つておくべきかな。でも、そんなに気にしなくてももう大丈夫かな。大丈夫だったら良いな」とか、色々。そうやつて気怠い脳みそをぐるぐる回していると、何故だろう、不意に可笑しさが込み上げてきた。

わけも分からず、僕は笑つた。ただし、万が一にもシノが部屋の外で聞き耳を立てているとまづいから、声はそれほど大きく出さずに。手から伝わる痛みが、一層に横隔膜を強く震わせた。

どれくらいの間、そうしていたのだろうか。そろそろ呼吸が苦しくなつてきて、僕は我に返る。それから何となく左手の腕時計に目をやつた。

息が止まるかと思つた。

反射的にリビングへと走り、そのまま部屋を突つ切つて窓を開けベランダへと飛び出す。驚きのあまり他の事など頭から吹き飛んでいた。

空は、まだまだ明るかつた。だけど、見上げた先に眩い太陽を見つけることは出来なかつた。いつしか渴き始めていた傷口の縁が、一足先に色味を濃くしていた。

部屋に戻つて窓を閉めた僕は、乱暴に挿んだカーテンを勢いよく引つ張ると、薄暗くなつた視界に構わずクローゼットの中を漁る。

ほんの一分ほどの後、雑貨を適当に詰めた箱の中からいふんと前に買い置きしていたまつさらの包帯とガーゼを探し出し、消毒もそこそこに水洗いした右手にきつく巻く。それから痛みを堪えながら靴下を履き替え、さらに首にネクタイを結ぶ。結局、ネクタイは黄色を選んだ。

僕は急いで部屋を出た。片付けなんか帰つてからで構わない。日が暮れるまでには余裕もあるだろうが、それでも焦燥感湧いてきて、足の動きを速めさせた。

歩き慣れた道を駆け、見慣れた街並みに振り向くことなく猛進する。

するとやがて視線の先に見えてくる洒落た雰囲気の喫茶店。ここからではまだ店内の様子の子の細部までは確認出来ない。果たして、彼女は今もそこにいてくれるのだろうか。

そうして遂に、僕はガラス張りになつている店の壁の前まで辿り着く。いつもの席に彼女は座つていた。途端にどつと疲れが襲つてきたが、喜びと安堵

感がすぐにそれを再び忘れさせてくれた。

僕は、少しの間だけ呼吸を整える為に使ってから、静かに店内へと入っていつも通り席に着いた。勿論、注文するのは彼女が飲んでいるものと同じハーブティーだ。読書に熱中しているのか、彼女は僕が来た事にも気付いていない。けれど、それで良い。楽しんでいるのなら邪魔をしたくないし、それに僕はそんな真剣な横顔を見つめている事も好きなのだから。

見覚えている店員がセットを運んできて、ちらりと僕の右手に視線を走らせて去っていった。僕は気にすることなく、左手を使って爽やかながらも甘い香りを楽しむ事にする。適度に温められているにも関わらず、火照った体が幾分か涼しくなった気がした。カップの向こうには、彼女が座っている。

細い指でページを繰り、膝上までのスカートからすらりと伸びる足は優雅に組まれている。三日前に行き付けの美容院でカットされた前髪が、長い睫毛に触れそうだと、彼女がカップに手を伸ばし、厚めの唇が陶器の縁に添えられる。だから僕も再びカップに口を付ける。ハーブの香りが鼻腔に広がった。

空調の整った喫茶店で、心地よい音楽を背景に、美味しいお茶を飲みながら彼女と一緒に時間を過ごす。とても大切に、大好きな時間。

僕は至福に浸りながら、誰よりも愛しい彼女だけに視線を注ぐ。真っ直ぐ、想いを込めて、黙々と文字を追う横顔を見つめる。時折、視界を横切る店員の姿を疎ましく思いながら。

ああ。やはり、彼女は今日も美しい。

〈了〉